

「泣いちゃおれん 全盲の娘がくれた28年」を見て

ドキュメンタリー番組「泣いちゃおれん 全盲の娘 おりえがくれた28年」を見た。

生まれながらの全盲のおりえさんが、18年前（10才当時）に盲学校に在籍しながら週2日は地域の小学校に交流学習として通っていた。

他の日も「普通学校へ通いたい」と訴えたが認められず、他の日も小学校に通うも他の生徒とは一緒に学ばずに空き教室での自主通学扱いで、卒業式にも出席を認められず。

中学校からは願いが認められ、社会福祉関係の大学院を卒業し、社会福祉士の資格も得て、心に病のある子どもたちのために養護学校（週2日）や地域支援センター（週2日）で非常勤で相談員の仕事に就いている。

父親は娘の仕事に就く姿を見ることなくガンで他界し、妹弟は自立し、今は母親との2人暮らしで、「娘が一人で生きていける力を早く身に付けて欲しい」と願う母と、「相談員の仕事を続けたい」と努力するおりえさん。

期待と不安を抱えて母娘の2人3脚はまだまだ続くよう。

番組は、この女性の10才から18年間も母娘を追い続けたドキュメンタリー番組も珍しく、番組スタッフの粘りに感服するし、まだまだ母娘に寄り添う取材を通して障害者を取り巻く社会の問題点を提起し続けて欲しいと願う。

番組で少し気になったのは、娘が生まれた当時の絶望感、自責の念、辛さ、戸惑い等を振り返ってインタビューに応じて話す母親の側でじっと聞いているおりえさんの表情のシーン。

当人は成人し母の愛情を十分に理解・実感しているとはいえ、自分の誕生で母が辛い思いをしたことを側で聞くのはやはり言葉に出さねど辛いだろうなあとと思う。

自分は以前に、ある親御さんたちへの講話の後の懇談で、障害のある我が子の青年同伴の母親が、息子の障害状況から話し始め出すと青年はうつむき加減になったので、「ご本人に話していいか、許可を得てからにして欲しい。」とストップをかけたことがある。

そして、青年の目を見ながら、「親であっても自分のことを人前で話すなら、許可を得てからにして欲しいよね。」と話しかけると、青年は「にこっ」と表情を和らげてくれた。

つまり、障害者問題等で「当人の尊厳を！」とよく聞くが、親も含めて係わり合う我々が、日常生活の中でそのことをどう意識し実践するかを、自らに問い続けなければならないと思っている。